

No. 10

2024/7/31

小野友道の

お節介な戯言

梅毒（1）



梅毒がこの十数年急増して止まない。梅毒はもとより性感染症の代表で、その感染に関してはヒトの本能に関係するので根絶は極めて困難である。梅毒は中国でその症状の一部が楊梅（ヤンメイ）すなわち日本でいうヤマモモ（山桃）の果実に似ていることからそう呼ばれたらしい。梅とは関係ない病名である。江戸時代楊梅瘡と呼ばれていたが、そのうち面倒くさくなって楊の文字が省略され、梅毒あるいは梅毒と呼ばれるようになった。今も昔も省略文化は同じなのである。梅毒は昭和40年頃から皮膚科の外来であまり見かけない病気となったので、今の若い皮膚科医などは2010年頃まで梅毒を診る機会がほとんどなかった。そういうわけで古い医者である小生が熊大医学部の梅毒の学生講義を昨年まで担当させられた。幸い（？）なことに2010年頃から梅毒患者が増え始め、2023年には全国で13251人が届けられた。ちなみに梅毒は感染症法で6類に含まれ、全例報告の義務がある。これで老医である小生がノコノコ出て講義をする必要がなくなった。それにしてもなぜ梅毒は急増したのか。NHKの調査（2023年1月）によると、性感染症（梅毒に限らない）になった、あるいは感染の不安があった時の性行為の相手（複数回答）を問うと、男性では特定のパートナー26.7%に比べ不特定のパートナーが71.3%と圧倒的に多かったのである。この不特定の相手に出会うのは中高年になるほど性風俗産業関係であった。また若者ではSNSやオンラインで出会い、性的関係の機会をもったという。そういえばコロナで家に閉じこもっていたはずの数年前にかえって梅毒患者が増えていたという現実を見るとSNSなどの影響が大きいなと妙に納得させられた。

